巻頭言

下向井　龍彦

今年に入って坂本賞三先生の弟子・孫弟子による研究書の出版が目白押しだ。下向井研究室読書会の院生学生メンバーにとっては大先輩であり、著者のなかには読書会の現メンバーもいる。以下にお名前と著書名を挙げる（学年順）。佐竹昭氏『近世瀬戸内の環境史』（吉川弘文館　二〇一二年二月）、曽我良成氏『王朝国家政務の研究』（吉川弘文館　二〇一二年六月）、詫間直樹氏『京都御所造営録―造内裏御指図御用（三）』（中央公論美術出版　二〇一二年三月）、鈴木理恵氏『近世近代移行期の地域文化人』（塙書房　二〇一二年二月）、今正秀氏『藤原良房』（山川出版社　二〇一二年七月）、渡邊誠氏『平安時代貿易管理制度史の研究』（思文閣出版　二〇一二年二月）。付け足しだが私も『物語の舞台を歩く　純友追討記』（山川出版社　二〇一一年一一月）。著書をまとめることは恩師に対する最高の恩返しであり、後輩たちの道しるべである。ともに学んだ仲間として心から祝福したい。

去年秋から今年三月下旬まで、私たちは『回顧と展望』の論文評作成に忙殺された。渡邊氏は対外関係を担当し、斎藤・山本・尻池の三氏と私は、摂関期・院政期（対外関係を除く）を担当した。私たちにとっては最近の研究動向を知るいい機会になった。そのために読書会と後期の大学院演習は全面的に『回顧と展望』対策に活用された。演習を受講した近世近代史、東洋史専攻の諸君にとっては一方的な奉仕になってしまった観があるが、不平も漏らさず論文評に取り組んでくれたことに感謝したい。その労に報いるために『回顧と展望』誌に付記として諸君の名前を載せてもらえるよう交渉したが、残念ながら受け入れてはもらえなかった。その代わりというわけではないが、紙数超過や中世との重複などを理由に『回顧と展望』への掲載を断念せざるをえなかった論文評を、諸君の名前も含めて本号に載せることで、謝意に代えたい。一昨年度の院演習の成果、『小右記』訓読・現代語訳の続編も載せる。

今年の六月六日、私にも還暦が訪れてくれた。一三年前の大病を思えば、よく無事にこの日を迎えられたものだと感慨も一入である。六歳の六月六日は習い事始めの日とのことであるが、六月六日に六〇歳になった私は、この節目の日を研究集大成始めの日としよう。後輩たちにつづいて、これから何年かかけて何冊かの著書にまとめたい。

二六年前、坂本先生の還暦記念祝賀会を広島駅北ロターミナルホテル（現ホテルグランヴィア）で開いたことがついこの間のように思い出される。坂本先生は前号に続いて本号にも巻頭論文を寄せて下さっているように、ますます御健勝で、「日本史の時代区分」という新たな研究分野に精力的に挑戦しておられる。県立文書館や図書館にお出かけになるときには、ご自宅から己斐駅まで歩いて下りられるとのことである。実は、私が校務などで中国新聞カルチャー教室に出講できないとき、恐れおおくも先生に講義を代わっていただいている。それも年に一回とか二回ではなく、五、六回を越える。還暦を迎えてなお恩師に甘えている不肖の弟子である。

先生は再来年、めでたく米寿をお迎えになる。坂本先生が築き上げた広島王朝国家論は、本号にみるように世代を超えて確実に受け継がれている。その襷を次の世代に受け渡す位置に自分がいたことを誇りとしたい。還暦を迎えたいま、このことをしみじみ思う。

本号の論説陣は、前号の坂本先生、渡邊誠・斎藤拓海両氏と私の四人に、菅真城氏・山本佳奈氏が加わって、六人になった。還暦記念号にしてはどうかという声があがっていたので、そのお言葉に甘えることにした。弟子の還暦記念号に恩師の玉稿を載せさせていただくというのは、非常識の誹りを免れないかもしれないが、私の非常識は今に始まったことではないし、坂本先生も弟子・孫弟子の論説に囲まれて、喜んで下さると思う。

本号の編集は、斎藤拓海氏にお願いしました。渡邊誠氏に続く広島王朝国家論第三の高揚期の旗手です。第五号に向けて皆さんのご寄稿を心待ちにしています。第三の高揚期を継続させましょう。前号巻頭言で書き忘れたことですが、本誌は製本を除き全部手作りです。猛暑の中、これからはじめる印刷・丁合作業に参加してくれる読書会メンバーと加入予定メンバーのみなさん。ありがとう。

（二〇一二年八月一日）